

タイトル:平成 29(2017)年度 研究セミナー(第 18 回)

日程:平成 29 年 12 月 16 日(土)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「フェイスマスクの意義と役割における地域比較とその変遷

ーアラブ首長国連邦とイランのゲシュム島の事例から(中間報告)」

後藤 真実(エクセター大学大学院)

2017 年 12 月 16 日と 17 日の二日間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催で行われた「中東☆イスラーム研究セミナー」に初めて参加させて頂いた。

私は日本の大学の法学部を卒業後、湾岸地域研究の修士号をカタールで修め、現在はイギリスの大学の博士課程に在籍している。博士論文提出期限まで残り約一年となり、博士修了後の就職を考えた際、今まで考えてこなかった日本の研究職も視野に入りたいとの思いが芽生えてきた。そして、まずは日本の中東研究に精通している研究機関や研究者の方たちと交流を深めたいという思いから、今回のセミナーへの応募に至った。私自身の研究は、現地調査や資料収集ではアラビア語、ペルシャ語、英語を主に用い、博士論文も英語で執筆しているため、専門分野の日本語がまったくわからず、本セミナーの発表要綱などの提出資料を作成するには大変苦労した。また、中東地域研究界ではご著名な先生方の前で発表をするのは大変勇気のいることではあるが、学生であるうちにそのような機会を得られることは大変貴重であると感じ、迷いながらも応募させて頂いた。

本セミナーでは博士論文の第一章にあたるフェイスマスクの意義とその変遷を長期フィールドワークで得たデータを基に発表した。文化人類学の視点から湾岸地域の研究をされている方は少なく、今回発表させて頂いた内容に関して多くの先生方から興味を持っていただいたことには大変光栄だった。また私の発表時には「カオ」や「モノ」の人類学を専門とされている先生も参加され、大変建設的なご意見、提言を賜った。私が今まで持つことのなかった視点なども多く頂き、追加の現地調査や今後の研究に役立てたい。

海外から参加し、知り合いのいない場で未発表の研究内容を一時間話すというのは容易なことではなかった。幸い私の発表は二日目であったため、一日目に他の受講生の発表を拝聴し参考にする機会があり大変助かったが、同時にレベルの高い発表を目の当たりにしたことで、焦りと緊張は増した。しかしながら、一日目の最後に懇親会が設けられ、先生方と美味しいご飯を囲みながらお話しができたことで緊張が若干ほぐれたことは確かであり、長年試行錯誤を重ね、受講生である若手研究者の立場にご配慮くださったプログラム構成であることが感じられた。また、一時間の質疑応答は研究内容に対する単なる批判ではなく、受講生の博士論文をいかにより良いものにするかに重点がおかれ、参加者で知恵を出し合うという形のものであった。是非、日本国外に関わらず、博士論文を執筆中の研究者には応募することを推奨したい。